
メランコリーを眠らせて

藍田陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メランコリーを眠らせて

【Nコード】

N7832D

【作者名】

藍田陽介

【あらすじ】

三十歳を目の前にして、後輩の結婚式に出席することになった亜紀は、図らずも昔の男と出会う。それを機に亜紀の心は、結婚、自分の不倫に揺れ動くが……。昔の男との再会が亜紀の心にもたらした恋愛観の変化と彼女の心にきざしたメランコリーに、亜紀自身が立ち向かってゆく姿を描く。

1（前書き）

新作ですが、今回は短編です。短いですが、シンプルに年齢とともに移ろう女のメランコリーを切り取ってみたいと思いました。
今回もどうぞ最後までお付き合いください。

山科^{やましな}亜季は朝起きたときからメランコリーな気分^{あき}にさいなまれていた。今日は休日だというのに。

亜季はシャワーを浴びて、トーストにスクランブルエッグとコーヒーで簡単な朝食を済ませた。そうしてクローゼットの前に立ち、三十歳を前にして増え始めた、落ち着いたデザインのドレスを物色した。

ウェブデザインを手がける会社で総務部に配属の事務職、それが亜季の今の職業である。横浜の山下町にあるその会社には、都内の女子大を卒業してすぐに入社した。もう七年になる。会社の事務職としてはすでにベテランの部類に入っており、時折「お局^{つぼね}」という揶揄^{やゆ}も耳にすることがある。直接面と向かって言われたわけではないが、会社の給湯室や女子トイレを通りがかったときに耳にして、年下の女性社員が本人を見かけて慌てて俯^{うつむ}くシーンも何度かあった。

ああ、私ももうお局か。

チャコールグレーやアイボリーの洋服の中で、ひととき目を引くターコイズブルーのドレスを手にして、亜季は大きなため息を吐いた。そのドレスは亜季が持っている服で、唯一といってもよいカラフルな服だった。

同じ部署には亜季より三つ年下の山下^{やました}彩音がいた。彩音はもともと営業部に配属され、営業事務を任されていたが、昨年亜季のいる総務部の女性が一人退職したため、その代わりとして一年前に総務部に配置換えとなった。彩音は若手女性部員の親分といったポジションにいた。彩音が亜季を揶揄することもあったが、彩音が他の社員から揶揄されることはなかった。着ている洋服のせいもあるが、彩音は実際の年齢より若く見えた。若手社員が彩音に下す評価も、亜季のそれとは対象的だった。

「彩音さん、その服どこで買ったんですか？」

「いやねえ、安物よ。買ったお店なんて、恥ずかしくていえないわ」
そんな他愛もない会話を通して、彩音は若い女性社員にとって身近な存在であることをアピールすることに成功していた。そうしてどちらかといえば地味ないでたちを好む亜季には、そのような言葉をかける者はいなかった。

山下彩音が結婚式の案内状を亜季に持ってきたのは、二週間前のことだった。相手はシステム開発部の彩音と同期で入社した坂下雅彦^{ひこ}である。後から聞いた話では、二人は入社当時から付き合い始めていて、結婚も時間の問題だったという。だが亜季はその噂をほんの十日前に始めて知った。

その結婚式が今日である。

昨日から亜季は憂鬱^{ゆううつ}だった。式そのものはチャペル式にせよ、神前式にせよそれなりに荘厳^{そうげん}である。しかしそのあとに続く披露宴を考えると、亜季はメランコリーが心の中にたちこめるのを抑えることができなかった。

主賓や親族のいたずらに長いだけの挨拶や友人代表として紹介された人たちの余興。そんなものを見ながら食事をしなければならぬ数時間のことを思うと、そのために費用をかけて披露宴を行なうことが、亜季にはとんでもなく無駄なことに思えるのだった。

ふと時計を見ると十時を回っていた。結婚式は十二時から予定されており、案内状には十一時半までに集合してほしい旨が書かれていた。結婚式と披露宴が行なわれる、横浜の元町にある「迎賓館」の名前を持つ式場までは、東横線沿線の亜季の家からは四十五分くらいかかるだろう。逆算すると準備の時間は三十分そこそこしか残されていない。

いけない、式に間に合わなくなってしまう。遅刻したら、会社に行ってから、また何をいわれるかわからないわ。

急いでターコイズブルーのドレスに着替え、その色に合わせたメーキャップを始めた。鏡に映った亜季の目には、いつしか細かい皺しわが入っていた。またため息を吐きなくなった。全体に肉付きが良く、丸い顔はまだまだ張りを保ってはいたが、鏡の中の亜季の目元には確実に彼女の年齢が反映されていた。亜季は目の周りに入念なメイクを施し、昔から自慢だったくつきりとした二重まぶたにもターコイズブルーのアイラインを引いた。

首にまだ二回ほどしか使ったことのないブラックパールのネックレスを飾り、同じ材質でできたピアスを耳に着けた。あらためて鏡に向かって立つと、一応自分でも満足できる程度の出来栄であった。ふっと一つ息を吐いて、黒いハンドバッグに一度はしまったヴァージニアスリムを取り出し、細い煙草の先に火をつけた。ゆっくりとメンソールの香りのする煙を胸いっぱい吸い込むと、ため息とともに煙を吐き出した。晴れた空からの陽光が窓から射し込んで、その光の筋に煙草の煙が絡みつき、不規則な模様を浮かび上がらせていた。

時間を気にして、半分ほど吸ったヴァージニアスリムをテーブルの上の灰皿にもみ消した。吸い口に付いた深紅のルーージュなまめの跡が艶かかった。

煙草の箱を再びハンドバッグにしまうと、亜季は席を立った。三月半ばの陽気では、ドレスだけで外に出るのはやや肌寒いと思い、白いスプリングコートを羽織ると駅に向かった。コートの前からのぞく鮮やかなターコイズブルーの服に、道行く人たちの視線が向けられて、亜季はややこそばいような気持ちで駅までの道を歩いた。道すがら、亜季は学生時代に出逢って、ちょうど彩音と同じ歳の頃に別れた泉川卓也いずみかわたくやのことを思い出していた。

卓也は今頃、どうしているだろう？

元町・中華街の駅からほど近くに、山手迎賓館はある。

純白の門をくぐり、ロビーへと進むと同じ会社の人間がすでにちらほら見える。今日彩音と結婚式を挙げる坂下と同期で、営業職に就いている松川浩之の姿が見えた。まつかわひろゆき松川もスプリングコートを脱いで、ターコイズブルーをあらわにした亜季に気付くと屈託ない笑顔を向けて近づいてきた。

「山科さん、遅いですよ。もう会社の人たちもほとんど揃ってます。うちの荒木課長なんて、三十分前に来て、今も挨拶の練習してますよ」

「準備に手間取ってしまったって、遅くなってしまったの。式はまだ始まっていないんでしょう？」

「ええ、新郎、新婦ともにまだ準備しているところですからね」

「じゃその間に煙草に行かない？」

「いいですよ。式が始まったらしばらく煙草を吸うこともできませんもんね」

時計を見ると、時刻は間もなく十一時半だった。案内状に書かれていた時間にぎりぎり間に合ったというところだ。亜季は松川と連れ立って喫煙所に向かった。

松川が挨拶の練習をしていたという荒木誠は、あらぎまこと松川がいる営業部の課長である。二年前までは、亜季のいる総務部の課長を務めていた。従業員が二百人に満たない亜季の会社では、全社員の顔も互いに見知った顔ばかりだった。このような環境では、よほど慎重にならない限り秘密は保ち難かった。にく

三年前に付き合っていた卓也と別れたときから、今にして思えば亜季はメランコリーにとり憑かれていた。煙草を吸いだしたのもこの頃だ。頻繁に女友達と酒を飲みに出かけて、その友達に勧められ

るままに、気がつけば煙草を咥くわえていた。酒の酔いのせいもあるうが、初めて吸った煙草は意外にも抵抗感がなかった。口の中にメンソールの爽快な香りがして、吸い込むと喉から肺へ煙はすつと落ちていった。やや頭が朦朧もうちろうとする感覚があった。だが一本目の煙草を吸いきる頃にはその感覚も薄れていた。

ある日、卓也のことを思い返ししながら仕事をしていた亜季は、当時課長だった荒木に小さなミスを指摘された。ミスそのものはごく単純な計算誤りであり、よくよく見返せばすぐに気付くはずだった。だから亜季は、そのミスを深く恥じた。

荒木は「山科さんらしくないな」といいながら、それ以上亜季をなじったりすることもなく、「訂正してくればそれでいいよ」といつてくれた。

「最近、山科さん、疲れているようだね。大丈夫かい」

「ええ、何でもありません。書類はすぐに訂正しますので……」

「頼むよ。それともしよかったら、今晚どう？」

そついいながら荒木は手で、グラスに入った酒を飲む真似をした。にこやかな荒木の顔を見て、亜季もすぐに「はい」と首を縦に振った。

その夜、荒木に連れられて入った馬車道のバーで、亜季はグラスを重ねた。いつしか荒木に、亜季は自分のメランコリーの原因である卓也との別れを打ち明けていた。思えば、これが秘密の始まりだった。

荒木は時々相槌あいづちを打つだけで、黙って亜季の話に耳を傾けてくれた。特に説教をいうでもなく、何かアドバイスをしてくれるでもなかったが、黙って自分の話を聞いてくれることが嬉しかった。アルコールを甘さで包み込んだカクテルとその勢いで荒木に語った愚痴は、いつとき亜季のメランコリーを忘れさせてくれた。バーが出る頃には、亜季も解放的な気分になっていた。バーを出たところの薄暗い階段で、荒木は亜季に視線を絡みつかせてきた。酔いの回った亜季の顔に、荒木の顔が近づいた。あつという間に二人の唇が重な

っていた。

階段を下りて石畳いしだたみの道にでると、荒木が亜季の肩に手をかけた。
「少し酔ったみたいだね。どこかで休んでいこうか」

その言葉の意味が判らないほど酔っていた訳ではなかった。だが久しぶりにメランコリーから開放された亜季は、自虐ひた的な自由に浸ってみたかった。

亜季はその夜、荒木に抱かれた。その日から、荒木との背徳的な蜜月は始まった。荒木にはすでに愛する妻がいて、その妻との間に子供も一人もうけていた。もちろん亜季も、荒木の実況は知っていた。それゆえ荒木との蜜月は、不倫関係を越えることはないことも……。

だがカクテルが忘れさせてくれたメランコリーが再び亜季の心を覆おほいだすと、荒木の求めるがままに不倫関係が続けるしかなかった。亜季の心を埋めて、メランコリーを薄める何かが必要だったがゆえ。

「山科さん、そろそろ結婚式場に向かう時間ですよ」

「あつ、そうね。行きましよう」

慌ててすでに燃えつくしたヴァージニアスリムを灰皿にぽとりと落とし、荒木との回想を振り払うように一度首を振ると、結婚式場へと向かった。並んで歩いていた松川が話しかけてきた。

「ところで山科さんは結婚しないんですか？」

どきりとして亜季は松川の方を向いたが、松川は前を向いたまま式場に向かって歩みを続けていた。

結婚式が執り行われるチャペルはまばゆい光に包まれて、すでに坂下と彩音の両家親族や友人らが並んでいた。亜季は松川と並んで最後方の席に腰掛けた。

ほどなくパイプオルガンの音が流れ、メタリックな光沢を帯びたチャコールグレーのタキシードを着た坂下が、牧師の格好をして壇上に立っている男の方へと歩いていった。気をつけの格好で指定の

場所に坂下が立つと、音楽のヴォリュームがひととき大きくなり、チャペルの扉が開いた。扉の向こうには、純白のウェディングドレスに身を包み、父親であろう恰幅^{かっぶく}のよい紳士と腕を組み、ブーケを手にした彩音が現れた。

スポットライトが彩音を照らすと、チャペルに並んだ招待客は一斉に起立して拍手を送った。彩音は一身に衆目を集め、この日はかりはシンデレラガールだった。ゆっくりと牧師の待つ壇に向かって、父親のエスコートで音楽に合わせて歩を進めた。

ヴェール越しにスポットライトに浮かび上がった彩音の横顔を見て、亜季は美しいと思った。少しでも主役の彩音がうらやましかった。式場への途中で、松川が投げかけた質問を頭の中で反芻^{はんすう}してしまふ。

自分が卓也と別れたのと同じ年齢で、今日の前にいる彩音は結婚しようとしている。しかし自分はその年齢のとき、荒木と許されないう契りを結んでしまった。永遠に結婚という栄誉を手にする事がない、ただ己のメランコリーを解消するためだけの荒木との大人の契約に、亜季は少しだけ後悔し始めていた。

2（後書き）

是非とも感想をお寄せください。お願いします。

結婚式が終わり、憂鬱な披露宴が始まった。乾杯用のシャンパンがグラスに注がれると、せっかくの泡が消えてしまうのではないかと思うほど長い挨拶が始まった。亜季は「おめでとうございます」とか「幾久しくお幸せに」という結婚スピーチ集に載っているステレオタイプな文句を聞きながら、運ばれてきた料理を食べていた。魚料理の皿に載っていたのは、タイとイセエビだった。ホワイトソースのかけられたその料理は、味そのものは普通だったが、タイとイセエビという取り合わせが結婚式の料理であることを主張していた。

式場で隣に座っていた松川は、披露宴会場でも亜季の隣の席を割当てられていた。横で松川はせっせと料理とワインを口に運んでいた。三つほど料理の皿を平らげて、腹がくちくになると松川が亜季に話しかけてきた。

「さっきもお聞きしましたけど、山科さんは結婚しないんですか？」
「しつこいわよ。したくなったらするわ。松川君こそ誰かいらないの」

亜季の言葉を無視して、松川は亜季にやや顔を寄せてきた。何なの、と亜季は思ったが、松川は構うことなく声をひそめた。

「実は山科さんが、男の人と馬車道を歩いていたのを見たっていう噂を聞いたんです。だからもしかしてステディな人がいるのかなと思って」

どきりとしたが、努めて平静を装った。松川の話聞く限り、一緒に歩いていた相手が誰だったのかまでは判明していないようだった。そのことだけが救いだと思った。

もしも相手が、営業部の荒木課長であることがばれてしまったら……。

亜季の会社では瞬く間に全社に噂が駆け巡り、亜季も荒木も会社

にいらなくなるかもしれない。よくよく秘密を隠し通すのは難しいと、改めて思った。

一通り挨拶が終わり、彩音がお色直しのために雛壇ひなだんを下りて、退室した。雛壇の後ろにあるスクリーンに彩音や新郎の坂下の幼少時代の写真が映し出された。お決まりのパターンへきえんきに辟易した亜季は、彩音の退室とともにやや座が崩れ始めたのを潮に、席を立てて披露宴会場の外に出た。

廊下の空気は、会場よりも冷たくて心地よかった。亜季は喫煙所に向かった。ヴァージニアスリムに火をつけて、バッグの中にあつた披露宴の席次表を眺めた。吐き出した煙が席次表の前を通り過ぎたとき、亜季の目はある一点で停止した。そこには「泉川卓也様」と書かれていた。

卓也？ まさか同姓同名なだけでしょう、きっと。

再び亜季は、荒木との関係を反芻した。そうして間もなく三十歳となる自分を振り返ると、このまま荒木との蜜月関係を重ねていくことにいい知れぬ不安を覚えた。つい先ほど、結婚式を終えて幸せそうな笑顔を振りまいていた彩音とおのが身を重ね合わせると、焦りはいいよいよ募る。

三年前、卓也と別れていなければ自分も今頃、結婚していたのだろうか？

自信を持って「結婚していた」とはいえなかったが、少なくとも今のように鬱病患者のような気分で日々を送ることはなかっただろう。結婚適齢期と称される期間を過ぎたとは考えていなかったけれども、荒木とこのまま結婚を前提としない関係をいつまでも続けていくことに、亜季は初めて疑問符をつけた。

喫煙所を出ると、亜季は化粧室に入ってルージユを引きなおした。煙草の匂いをごまかすために、香水も少しだけ首筋に付けた。

会場に戻るため、ロビーに出た。ロビーに置かれていたソファに

座る人を見て、亜季は我が目を疑った。足は凍りついたように、歩みを停止した。ほかに人のいないロビーからは、沈黙だけが聴こえてきた。足を組んで、眠ったように目を閉じたまま腕組みをして座っているソファの人は、間違いなく卓也だった。互いに三年という期間を経て、その分だけ歳をとっていたけれど、大学に在学中から約六年もの間付き合っていた男だ。間違えるはずはない。

そつと亜季は卓也に歩み寄った。あと一メートルという距離まで近づいたとき、亜季の着ていたロングドレスの衣擦きぬすれの音で、卓也は目を開けた。目の前のターコイズブルーのドレスを下からなめるように上に見上げていった卓也の視線は、亜季の顔まで来たところで固定された。

「……亜季？ 亜季だよな」

「卓也、久しぶりね。さつき席次表で卓也と同じ名前を発見して、まさかと思っていたんだけど、やっぱりあなただったのね」

「ああ、新郎の坂下家の親父さんが、俺の顧客でな。ま、これも仕事のうちなんだ。ところで俺も同じことを思っていたよ。山科って苗字もなかなかないしな。でもびっくりしたよ。ドレスなんか着て現れると、妙に女らしいな」

卓也はそういつて笑った。亜季がかつて愛した笑顔だった。卓也が笑うと眉が下がり、目が眠っているように細くなる。その表情は屈託のない優しさに満ちていて、亜季はその笑顔が好きだった。

「仕事は順調？」

「まあね。でも世の中が不景気なのはどこも同じだろう。いつまで経っても、『貧乏暇なし』ってところだよ」

卓也は大学卒業後、西麻布にある小さな広告代理店に入社した。社会人になってからは、亜季の会社は横浜にあったこともあり、毎日のように逢うこともなかったが、二年経って二人は同居を始めた。その頃は夫婦ごっこを楽しんでいるようで、毎日が楽しかった。

しかし三年前、卓也が別の女性と付き合い始めたと思い、それがもとで喧嘩別れしてしまった。些細な喧嘩がもとで卓也が出て行く

と、一人で住むには広すぎるマンションは空虚で満たされた。結局それはほとんど亜季の勘違いであることが後に判明したが、そのときには卓也は、もう亜季のもとにはいなかった。結局ひと月立たないうちに、亜季もその部屋を引き払い、今の自由が丘の部屋へと引越した。

「卓也は今どこに住んでるの？」

「恵比寿。家賃はちよつと高いけど、会社に通うには便利だからな」「そうね」

「そうだ、亜季。折角ここで会ったんだ。もし良かったら披露宴が終わったあと、ちよつと飲みに行かないか。それとももう俺とは飲みたくないかな？」

亜季はやや逡巡した後、「いいわよ」と返事をした。披露宴の後、二次会にも誘われていたが、適当に言い訳をして断ることはできるだろう。

「じゃ披露宴が終わったら、またこのロビーで待ち合わせしよう」
亜季と卓也は連れ立って、披露宴会場へと戻った。席に戻るとちよつと松川が、数人の男性社員と全身タイツをまとって、下品な踊りを舞っていた。いつもならあまりの下品さに目をそむけるが、亜季は我知らず手を叩いていた。同様の決して上品とはいえない余興よきようが二つ終わり、その頃には元の服装に着替えを終えて松川が席に戻ってきた。ちよつとそのときに、デザートとコーヒーが運ばれてきた。

「山科さん、どこに行っていたんですか？ せつかくの僕たちの出し物、ちゃんと見てくれました？ これでも二週間前から、毎日秘密の練習をしていたんですから」

「ええ、途中から見たわよ。見るんじやなかったって後悔したけど」「うへっ」松川は首でも絞められたかのような声を出し、「厳しいですね」といいながら頭を掻いた。

たっぷりのチョコレートでデコレーションされた甘いケーキを、ブラックコーヒーで流し込んだところで、司会者が披露宴の最後の

演目である、両家の親への花束贈呈が始まることを告げた。部屋の照明が落とされ、部屋の一番後ろの席から立ち上がった両家の親にスポットライトが当てられた。

大げさとも思える両手で抱えないと持てないほどの花束とともに、新郎と新婦が両親に歩み寄り、それぞれ互いの義理の親になる人に花束を渡した。そうしてきつと式場のディレクターが何度か書き直したであろう涙を誘う両親への手紙を読み終えると、披露宴は終了となった。

そのまま新郎、新婦とその両親が会場の外に並んで、会場を出てゆく人たち一人一人に挨拶していた。亜季もそそくさと帰り支度をして会場を出ようとする、背後から松川の声が飛んできた。

「山科さん、二次会出席されますよね？」

「ごめん、きょうはちよつとこの後予定があるの。悪いけどキャンセルさせてもらうわ」

そっくり捨てて、亜季は会場を後にした。会場の外で頭を下げた彩音に「お幸せにね」と一言声をかけると、足早にロビーへと向かった。

3（後書き）

是非とも感想をお寄せください。お願いします。

ロビーのソファに亜季は腰掛けていた。後を追いかけるように、卓也が現れた。二人はアイコンタクトをして、互いに小さく頷くと、人目を避けるようにそそくさと山手迎賓館を出た。ロビーは披露宴を終えて出てきた人々でごった返していたため、却って人目を避けるには好都合だった。駅に着くまで、亜季は卓也と一メートルの距離を保っていた。

駅に着くと卓也が大きく伸びをした。

「ああ、何だか疲れた。だけどまさか亜季に会えるとはね。来た甲斐があつたなあ」

「私も。朝は結婚式に行っても、疲れるだけだなんて思っていたけれどね」

顔を見合わせて、二人は笑う。ちょうどプラットホームに電車がすべり込んできたところだった。二人は乗り込み、がらんとした車内で、肩を並べてシートに腰掛ける。

横浜までは十分ほどだ。

「まだお腹は空いていないよね？」

「あれだけ披露宴でいろいろ食べたもの。まだお腹は一杯よ」

「じゃどこか、バーにでも行こうか」

「うん、そうね。せっかくだからおいしいお酒が飲めるところがいいわね」

駅から地下を通って、そのまま行けるホテルの最上階のラウンジに二人は向かった。まだ外は完全に夜になりきっていないが、最上階から見下ろす横浜の街は、すでにイルミネーションに彩られて美しかった。

亜季のためのマティーニと卓也がオーダーしたバーボンウイスキーが運ばれてきた。横浜の夜景を眺めながら、挨拶代わりの近況報告で二人の会話が始まった。

「煙草、吸ってもいい？」

「いいよ。煙草を吸い始めたんだ。俺と付き合ってた頃は、『臭いし、体にも悪いからやめたほうがいい』っていつもいつてたのにな。俺はもうやめたぞ」

亜季にとつて、世界一お気に入りの笑顔をたたえて、卓也がいった。この笑顔を向けられると、卓也の言葉もまったく嫌味には聞こえない。かつて、何度この笑顔に救われたことだろう。しかし三年間という時間の間に、亜季は煙草を覚え、卓也はあれほど好きだった煙草をやめていた。二人の間に流れた時間のギャップを感じた。

卓也はその晩、終始笑顔のままだった。しばらく他愛ない会話をしていたが、二杯目のグラスが運ばれてくると、外を眺めたまま卓也が訊ねた。

「ところで亜季は、どうして煙草を始めたの？ 俺はずっと、亜季が煙草嫌いなんだと思っていたよ」

ようやく夜の帳が落ちたバーのウィンドウの中で、卓也は笑っていた。亜季は窓の外の卓也を見たまま、どうするべきか逡巡していた。卓也もグラスのウイスキーをなめるようにしながら、亜季が口を開くのを待った。

亜季はもう一度、卓也のこの笑顔に甘えてみようと思った。卓也が今日、このバーに誘った以上、もう三年前のわだかまりも解けたのだろう、と自分に都合よく解釈した。亜季は手にしていた、バーに入ってから二本目のヴァージニアスリムをもみ消すと、ようやく窓の内側の、隣に座っている卓也のほうに向き直った。

「実はね、私……今、付き合っている人がいるの」

「ほう、そうだったのか。じゃ俺がこんなところに誘ったのはまずかったかな」

「いいえ、そうじゃないわ。むしろ今日卓也に会えたのも、ここにこうして誘われたのも嬉しかった。本当よ」

亜季の目に光るものがあつた。それを見た卓也の顔から、笑顔がなりを潜めた。卓也はやや眉をひそめて、心配そうに亜季の顔を覗き

こむ。

「どうしたんだよ、亜季。もし心配なこととかがあるんなら、話してみてくれないか」

「私の付き合っている相手というのは、妻子さいしもちの男なのよ。つまり……不倫なの」

「……亜季はそれでもいいのかい？」

卓也は三年前とちつとも変わっていないかった。不倫と聞いても、決して「それは良くない」とか、「不倫なんてやめろ」といったようなことをいきなり口にしたりしない。亜季は、卓也のそういった相手の意思を最大限に尊重するような話し方も好きだった。

「いいとは思っていないわ。でももうこの関係も三年近くになるの。心のどこかでは、もう不倫なんて関係はやめなければってわかってるのに……」

「相手の男のことを気に入ってしまったってどうか？」

「それも違う。少なくとも、かつて卓也を好きだったようには愛せない」

「そうか。じゃ今は、亜季もその男との関係を清算してしまいたいと思っっているんだね」

こくりと亜季は頷く。それが合図だったかのように、亜季の目から涙があふれ出た。亜季の目に映る横浜の夜景が、涙で曖昧あいまいにぼやけてゆく。

「話してくれてありがとう。じゃ話してくれたお礼ってわけじゃないけど、この卓也さまが一肌脱いじゃおう」

「えっ、どうするの？」

涙で少しアイラインが流れ始めた目を、亜季は卓也に向けた。

「とりあえず、まずはその目をどうにかした方がいい。せつかくドレスアップしても、顔がパンダじゃなあ」

卓也の顔に笑顔が戻った。慌てて亜季は目の前のウィンドウの中にいる己の顔を見た。アイラインが流れ出た顔は、まるで福笑いのようだと思い、つい亜季も吹きだした。

「じゃちよつとお手洗いに行ってくるね」

「ああ、そうした方がいい。レディの顔が台なしだぜ」

レディの部分だけ本当の英語の抑揚をつけて、卓也がいった。亜季は「ちよつとごめん」と言つて、席を立つた。卓也は氷でだいぶ薄まってしまったバーボンウイスキーを飲み干し、バーテンダーにお代わりをオーダーした。

五分ほどして、亜季は席に戻ってきた。アイラインもきれいに引き直されており、ついでにルージュも引き直したようだった。ただ結婚式用に引いていた深紅しんくのものではなく、もっとナチュラルな色合いのピンクで光沢のあるルージュに変えていた。

「亜季、一つ提案があるんだけど」

「なあに」

「俺と一芝居打つてのはどうだい」

「どういうことよ？」

「だからさ。俺が君のフィアンセってことにする。それで君と那不倫相手の男が飲んでいるところにも、偶然のように現れるんだ。そこで俺が『亜季のフィアンセだ』と自己紹介をするか、君が相手の男に俺をフィアンセだつて紹介してしまう。そうすれば君も、その男と手を切れるだろう。少なくとも相手の男にしてみたら、不倫という負い目がある以上、君にフィアンセがいるとわかったら、今までのように深追いはしないんじゃないのかな」

「でも卓也に迷惑をかけることになるかもしれないわ。相手の男つて、かつての私の上司だった男よ」

「大丈夫だ、きつとうまくいくさ。それに俺の上司つて訳じゃないし、君さえ良ければ……俺は君の役に立ちたいんだ」

「ありがとう」

また亜季は泣きそうになった。

結局亜季は、卓也の手を借りることにした。卓也が考えた一芝居を成功させるために、もっと詳細を詰めようという話になった。そこで亜季がいう。

「じゃ私の家で、話の続きをしない？ ビールかワインくらいしかないけど、どう？ 昔のように」

「昔のように、か。うん、いいね。じゃ行こう」

割り勘にしようという亜季の申し出を頑強に拒んで、卓也は支払いを済ませた。二人は再び横浜から電車に乗り込み、亜季のマンションに向かった。

缶ビールであらためて乾杯をすると、二人は相談を始めた。

決行日は明日。まず亜季がいつもの馬車道のバーに荒木を誘う。

頃合を見て、近くで待っている卓也の携帯電話に連絡を入れる。そこに卓也が、誰かと待ち合わせをするために立ち寄った客のような振りでもして、店に現れる。亜季はなるべく店の入り口から目に付く席に座ることにして、お互いに驚いた顔で偶然に会ったように装うことになった。

それからは「ばれてしまったては仕方ない」というように亜季が荒木と卓也を互いに紹介する。そこで亜季が卓也を「私のフィアンセです」と荒木に向かって宣言する。そのときの荒木の反応は読み難いが、いずれせよ卓也はそのまま亜季の手を取って、バーから連れ去ってしまうつもりだった。

きつとうまくいくだろう。一人ではなく、卓也が一緒なのだ。何かいたずらを思いついた小学生のように、亜季は胸を弾ませた。心の中で、すっかり卓也に寄りかかりつきりになっている己に、まだ亜季は気付いていない。

「ねえ卓也、今日は私のところに泊まっていけば」

卓也も同意した。互いにはつきりとは口にしないが、確実に三年間という時間のギャップは、縮まりつつあるのを二人とも感じていた。

「じゃシャワーを浴びたいから、借りてもいいかな。昔のように」「どうぞ」

亜季は白いバスタオルを出してきて、卓也に手渡した。卓也がシ

ヤワーを浴びている間、ヴァージニアスリムを吸いながら、亜季は明日仕掛ける「一芝居」を何度もイメージトレーニングしていた。それはとても楽しい空想だった。

卓也と再会したその夜、二人は三年ぶりに交わった。ここにも確実に、三年間と言う時間のギャップはあった。だから二人の交わりは、決してスムーズではなかった。全ての動きが、タイミングが、全て少しずつずれていた。その夜、亜季はギャップに阻まれたがゆえに達することはなかった。

だが交わりを終えて、硬く締まった卓也の腕に頭を載せたとき、亜季は心が高揚し、エクスタシーに達するのを感じた。

4（後書き）

是非とも感想をお寄せください。お願いします。

5（前書き）

最終話です。短い物語ですが、おつきあいいただき、ありがとうございます。

最後まで亜紀のメランコリーの行方を、見守ってください。では…

…

久しぶりに自分のベッドに自分以外の者と寝たせいで、その夜亜季はなかなか寝付けなかった。あるいは昨夜、卓也と相談した秘密の芝居を決行することへの興奮も手伝ったのかもしれない。卓也は隣で、昔と同じようにいびきをかいて眠っていた。寝付けないうちに、妙なリズムを帯びたかつての恋人のいびきに耳を傾けているうちに、亜季もいつしか少しだけまどろんだ。

しかし夜が明けて、まだ空が濃いオレンジ色に染まっている時間には、亜季は再び目を覚ました。そとと亜季はベッドを抜け出し、カーテン越しに射し込むオレンジ色の光の筋を眺めながら、ヴァージニアスリムを半分だけ吸った。半分吸いきったところで、ベッドから卓也が亜季を呼ぶ声がした。起こしてしまったのだろうか？

亜季は再び、ベッドへと戻った。

「ごめん、起こしちゃった？」

「いや勝手に目が覚めてしまっただけだよ。ただ亜季がいなかったから、呼んでみたんだ。悪い、悪い」

それから二人は短いセックスをした。睡眠不足の亜季の体は、昨夜よりも反応がいいように感じた。実際、時間は短かったけれど、今朝の交わりで亜季は肉体的なエクスタシーも感じていた。

ふと亜季は、おのが心にずっとわだかまっていたメランコリーが、オレンジ色に輝く朝日の向こう側にでも飛んでいったかのように消え去っていることに気付いた。

「シャワー浴びるでしょ」

亜季はにっこりと卓也に微笑みかけて、バスタオルを取りに全裸のままの格好で、ベッドを抜け出た。卓也は朝日に照らされている亜季の体が、シルエットのように動くのをベッドに横になったまま、見ていた。

三年前より、少し肉付きがよくなったかな？

しかし亜季の髪の手触りも、肌の柔らかさも、卓也が好きだった三年前のままだった。

卓也がシャワーを浴び終えて、亜季と交代した。何となく隣の部屋への配慮からか、ヴォリュームを絞って、テレビをつけてニュースを見ていた。

ふとテーブルの上に、亜季が出しっぱなしにしておいたヴァージニアスリムが目に入った。

そういえば、亜季と付き合っていた頃は、ずっと吸ってたんだよな。もうやめて二年以上経つのか……。

箱から一本取り出して、指に挟んだ。久しぶりの煙草は、女性向けのせいか妙に細くて、卓也の指では挟みにくかった。しっかり挟んでいないと、滑り落ちてしまいそうだ。

亜季とおなじように……。

火をつけた。ゆっくりと吸い込んでみた。もったきついかなと思っていたが、メンソールのおかげなのか、もともと軽い煙草だからなのか、意外なほどすなりと煙は卓也の喉をくぐり抜けた。メンソールの爽快感だけが口中に残って、まるでペパーミントガムを噛みながら煙草を吸っているような感覚だった。

テレビを見ながら、長い煙草もほとんど吸いきってしまう頃、バスタオルを体に巻きつけた亜季が、バスルームから出てきた。

「あれ、卓也。また煙草吸ってるの？」

「ああ、二年ぶりだな。一本貰っちゃったよ。もう吸えなくなってるかと思ったけど、意外と平気だった」

またあの笑顔が卓也の顔を覆った。折角禁煙していたのに、と卓也をなじろうとした言葉を、亜季は飲み込んだ。この笑顔を見るとなぜだか卓也への非難がでなくなってしまうのだ。亜季は心身ともに、三年前に戻りつつあった。

着替えをすませて、亜季はテーブルに卓也と並び、テレビを見た。卓也は亜季のために、彼女がシャワーを浴びている間にコーヒーを

淹れてくれていた。一人暮らしを始めてから、揃いのカップなど用意していなかったから、テーブルの上にはデザインも大きさも不揃いのマグカップが二つ置かれていた。

「ありがとう」

亜季は卓也の心遣いに、努めて軽い口調で感謝してから、コーヒーを一口すすった。いつもより少しだけ苦かった。そうして亜季は、ヴァージニアスリムを一本取り出してから、「どう」と卓也にも勧めた。卓也は「おう」といって一本箱から抜き取ると、口に咥えてライターで火をつけ、そのままライターの火を亜季に向けた。亜季の煙草にも火がつくと、二人は深呼吸でもするように、同時にゆっくりと煙を吐き出した。

テレビでは、国産車のセダンが、新しいモデルを発売したことを伝えるコマーシャルが流れていた。卓也がテレビの液晶ディスプレイを指差しながらいった。

「亜季、このCMは俺の会社が手がけたんだぜ」

「へえ、結構このCMのBGMが気に入ってたのよ。卓也の会社、なかなかいいセンスしてるわね」

二人は顔を見合わせて、にっこりと笑いあった。コーヒーを飲み終わると、亜季は二人のカップをキッチンのシンクに置いて、バッグを手にしてテーブルの上に置いてあった部屋の鍵を取り上げた。

部屋を出て、ドアに施錠すると鍵をバッグにしまう前に、キーホルダーから一つ鍵を抜いた。

「はい、これ。合鍵だけど、卓也に一つ渡しておくわ。昔のように、ね」

「……亜季。いいのか？」

亜季は満面の笑みを作って、大きく頷いた。そうして二人はエレベーターで連れだつて一階まで降りた。

駅まで並んで歩き、改札をくぐったところで反対側のホームに向かう卓也と別れた。

「それじゃ、今日の夜のお芝居よろしくね」

「おう、七時までには行けるから、あとは携帯でうまいこと連絡してくれよな」

そういつて、卓也は背を向けて、大きな掌を^{うで}広げて手を振りながら、ホームへ続く階段を一段抜かしで上がっていった。

亜季は夕方、六時半過ぎには荒木との密会に使っていた、馬車道のバーにいた。十五分遅れで荒木が到着する手はずになっている。

亜季はこの日、まったく仕事が手につかず、午後七時には横浜に来るという卓也の予定に合わせて、荒木を馬車道に誘い出すことだけに心を砕いた。といつても亜季と卓也の企みを知らない荒木を誘い出すには、亜季が会社から与えられているメールアドレスから、短いメールを二通出すだけでこと足りた。

バーに入ると、亜季は窓際で、入り口からの見通しもいいテーブルに腰掛けた。すでに顔見知りの店員が近寄ってくる。

「こんばんは、山科さん。今日はこの席でいいんですか」

「うん、何だか外の景色を見ながら飲みたくて」

「お一人……ではないですよね？」

「もうすぐ荒木さんも来るわ。とりあえずビールちょうだい。喉がからからなの」

「はい、すぐにお持ちしますよ」

おしぼりをテーブルに置いて、店員が店の奥に立ち去ったのを見て、亜季は携帯電話を取り出した。手早くメールを送信した。相手は卓也である。

今、例の店に着いたわ。間もなく荒木も来ると思う。今のところ、予定通り！

オーケイ。俺も今そちらに向かってるところ。約束の時間には馬車道に着いていると思う。店に入ってもいいタイミングになったら、また連絡してくれ。

じゃまた後ほど連絡する。間もなく荒木が来ると思うから。了解。それじゃまた後で会おう。

携帯電話を閉じたところで、ビールが運ばれてきた。よく冷えたビールを一口喉に流し込み、時間を見た。荒木の到着まで、時間通りならあと五分というところか。ヴァージニアスリムに火をつけ、外の石畳を歩く人たちを見ながら、亜季は今日の作戦を考えていた。

ビールを半分ほどあけたところで、荒木がバーに現れた。荒木は入り口で手を上げて、「待ったかい」といいながら亜季の座るテーブルへと進んだ。座りながら荒木もビールを注文した。

「それにしても亜季から誘ってくれるなんて、久しぶりじゃないか。何かあったのかな」

「特に何かあったって訳ではないの。ただ何となく飲みたくて、誘っちゃった。仕事の方は大丈夫だった？」

「ああ、ちょうど今は暇ひまな時期なんだ。営業が暇ひまなんていつていたんじゃない、会社が潰つぶれてしまいかもしれないけどね」

荒木は何の疑いもなく、屈託のない笑いを亜季に投げかけた。作戦の第一段階は、上々の首尾だ。荒木のビールが到着したところで、どちらからともなく「乾杯」といつてグラスを鳴らした。亜季がシーザーサラダとチキンの入ったペペロンチーニを注文した。荒木がそれに枝豆を追加する。

二人はあつという間にビールを二杯ずつ開けて、荒木はすでにジンを飲み始めていた。荒木は大きな氷を入れたグラスにジンを注いで、ライムをしぼっただけの飲み方が好きだった。亜季はいつものドライ・マティーニだ。

亜季がちらつと時計に目を走らせる。時刻は午後七時を五分ほど回っていた。予定通りなら、もう卓也はバーの近くで待機しているはずである。少し酔いが回り、饒舌じょうぜつになり始めた目の前の男を見る。荒木とも今日で最後なんだ。明日からはただの同じ会社の社員という関係に戻る。でも本当に、ただの社員という関係に戻るのだろうか？

ヴァージニアスリムをくゆらしながら、何も知らずに話をしてい

る荒木を見て、ふと哀れに感じた。同時にこの関係を突然解消した亜季に対して、荒木がどのような態度をとるのかという点についても、不安であった。

しかしもう後戻りはできない。外では卓也が……、卓也が待っている。

煙草を吸い切ると僅かに残っていたマティーニを飲み干して、亜季は席を立った。ほの暗い照明が、グラスに残ったオリーブの実を照らし、クリスタルボールのように光っていた。

「ちよつとトイレに行つてきます。ごめんなさい」

「ああ、いいよ。お代わりは同じものでいいかい？」
「ええ」

亜季は店の奥にあるトイレに立ち、荒木はオーダーの追加をするため、店員を手を上げて呼んだ。トイレのある位置からは、亜季たちが座っているテーブルは見えなかった。これも計算済みだ。テーブルが見えなくなると、亜季はバッグから携帯電話を取り出した。携帯電話を開けると液晶の光がまぶしくて、その光で荒木に気取られることはないかと思わずテーブルを振り返った。もちろんそこから、亜季が携帯を使っていることが見えるはずはなかった。

落ち着かなくては。ここで変に焦^{あせ}つて、卓也が来る前に怪しまれたら元も子もないわ。

メールの新規作成画面を開き、送信者の欄に卓也の名前を呼び出した。そうして「そろそろ来て」と短い文を打ち込んだ。店の奥は少し電波の感度が悪いようで、一度送信エラーとなつてしまった。亜季はトイレの中に入り、小窓に携帯電話を向けて立った。もう一度送信ボタンを押すと、やっとメールが送信できた。

トイレの狭い窓から外を見ながら、亜季は卓也の返信を待った。その窓からは店の裏手の路地しか見えなかった。湿っぽい、ところどころぬかるんでいそうな地面は、表の石畳とは対照的に、退廃の匂いがした。

手の中で携帯電話が震えた。はっと携帯電話を見ると、サブディ

スプレーには「泉川卓也」の文字が表示されていた。

携帯電話を開くと、卓也からの返信メールだ。

3分後に店に入る。それまで普通に話でもしていてくれ。俺が店に入って、亜季に話しかけるまで、君は俺のほうを見ないこと。いいね。じゃ。

携帯を閉じて、テーブルに戻る。荒木は所在なさそうに外を見ていた。追加の飲み物はすでにテーブルに置いてあり、荒木のグラスは半分ほど飲んだ後だった。

「ごめんなさい」

テーブルに座りながら亜季がいった。それから話題は先日 of 彩音の結婚式に移った。荒木を目の前にして、卓也との偶然の出会いがきっかけで今日の企みがあると思うと、亜季の記憶はどうしても結婚式に行き着いてしまう。

「なかなか楽しい結婚式だったね。坂下君と山下さんもお似合いなんじゃないかな？　うちの松川も誰かいい人いないのかな？」

「松川君も早くいい人がみつかるといいですね」

亜季はそういいながら、心の中で「私はどうなの？」と荒木に向かって問うた。ちらっと入り口に目を走らせた。バーのドアがゆっくりと動き出すのが見えた。慌てて視線を荒木に戻す。

亜季の胸の動悸が、今にも躍りだしそうなくらい早くなった。ヴァージニアスリムを^{くわ}咥えて、火をつけながら荒木を見やる。わずかだが、煙草を挟んだ指先が震えている。荒木は相変わらず笑いながら、披露宴の余興の思い出話をしていた。煙草を深く吸ったとき、亜季の背中から声がした。

「やあ、亜季じゃないか。こんなところで飲んでたんだ」

そういいながら彼女の肩が叩かれた。背後から来るなんて聞いていない、と思った。慌てた亜季は煙を一気に吸い込んでしまい、むせた。

振り向くと卓也がいたずらっぽい目をして立っていた。いつもの笑みを浮かべながら。

亜季はなるべく自然に会話をしなければと思い、卓也に話しかけた。

「あら卓也じゃない。どうしたの、こんなところで」

「ちょうど仕事でこっちに来てね。そのまま帰るのもなんだなと思つて、ふらつと入つてみただけだよ。そうしたら偶然にも、亜季がいたんでびつくりしたよ」

卓也は「偶然」という言葉にやや力を入れた。亜季は片方に二人腰掛けることのできるベンチシートの自分の位置をやや奥にずらし、一人分のスペースを空けた。話しながら、卓也は亜季の隣に座り込むことに成功した。

荒木は明らかにこの突然の闖入者に、迷惑そうな顔をしていた。

亜季の方を見ていった。

「こちらは亜季とはどのような関係の方？」

亜季は少し逡巡した。ちらつと卓也を見ると、かすかに彼が頷いたように見えた。いきなり核心に触れなければならなくなつたかと思つたが、亜季はきつぱりと荒木に告げた。

「実は私、卓也と結婚の約束をしています。今まで黙っていてごめんなさい。だから荒木さんとは、もうこれ以上、付き合えない」「えっ」

ジンライムとともに、荒木はその一言を飲み込んだ。すでに家族を持つ荒木には、「結婚」という二文字は予想以上に有効だった。それは荒木がおそらく絶対に亜季に提供できないものであるがゆえに。

それきり荒木は黙り込んだ。卓也は注文したビールをほぼ一気に飲み干して、例の人懐ひとなつつこい笑みを浮かべたまま、腕を組んでいた。荒木と卓也の視線が一直線につながり、亜季の視線だけが、その直線をなぞるように行ったり来たりした。

荒木はジンライムを飲み干すと、やおら立ち上がった。

「亜季、今晚は僕が退散したほうが良さそうだな。僕が君のためにマティーニを奢おごるのは、今日が最後かな。幸せになつてくれ」

立ち上がって、スーツの胸のポケットから財布を取り出す荒木に、亜季はやや涙ぐんで頭を下げた。

「荒木さん、本当にごめんなさい」

「君が謝ることではないさ。こつちも脛すねに傷のある身なんだ。これ以上、君の幸せを妨さまたげる訳にもいかないだろう。僕はそこまで未練がましい男ではないつもりだよ」

そう言って、卓也に一つ頭を下げると、とうとう最後まで彼とは口を聞くことなく荒木はバーを後にした。今さらながら、荒木が大人の男としての対応をしてくれたことに、改めて亜季は感謝した。

それからは卓也が、荒木の座っていたシートに腰掛けて、しばらく黙って二人で飲んだ。亜季はマティーニを、卓也はバーボンのオンザロックを。店内には心地よいジャズのサックスの音色が響いている。

少し遠くに目を向けると立ち並ぶビルの上に、わずかに姿をのぞかせている巨大観覧車のネオンが見えた。ネオンは時に緑に、時に赤に変化し、亜季は飽きることなくその光を眺めていた。

「ねえ卓也、今からあれに乗りに行こうよ」

「あれって？」

「ほら、あそこに見える観覧車よ。いつも近くで見ていたけれど、今まで一度も乗ったことがないの。本当にきれいなものが、あんな近くにあったのね」

「わかった。じゃ行こう」

二人はグラスに残った酒を飲み干して、バーを出た。亜季は、きつと今日がこの店にくる最後の日だと思うと、ちよつとだけ名残惜しかった。この店のマティーニもBGMも大好きだったから。

バーを出て、馬車道を海に向かって、二人で並んで歩いた。正面から吹いてくる海の湿り気を少しだけ含んだ風が、酔い心地の亜季の顔を気持ちよくなでて行った。二人は万国橋を渡り、横浜ワール

ドポーターズのビルのところで左に折れる。すると目の前に先程の巨大な観覧車が一望できた。

ちかちかとまばゆいくらいのカクテル光線が、間断なく観覧車から放たれる。運河を挟んで二つに分かれた遊園地の中に入り、コスモクロックと呼ばれる大観覧車に並んだ。平日の夜ゆえ、観覧車は主に乗る人よりもそれを眺める人たちのために光っていた。だから二人はすぐに観覧車に乗ることができた。

しばらく狭い室内で、二人は沈黙を聞いていた。なんとなくお互いにかけてる言葉が見つからない。亜季は目の前に現れた横浜港の、油を流したようなブルーグレイの海に目を向ける。

海はその周りに立ち並ぶビルの光を映し出していて、またまばらに浮かぶ船の小さな光が瞬いていた。きつとその底には、亜季のような女が投げ捨てたメランコリーが堆積たいせきしているのだらう。

やがて目の前に、印象的な弧を描いたインターコンチネンタルホテルが大パノラマの中に突き出した。小さく規則正しく並ぶ窓を見ながら、狭い個室の沈黙を破ったのは亜季だった。

「さつきはありがとう」

「本当にあれでよかったのか」

卓也はここでも気を遣っていた。いつもの眉が下がる笑顔が、今はなかった。卓也の顔にいい知れぬ緊張が貼り付いているように見えた。

「うん、それより……」

「それより？」

「よく考えてみると、大変なことしちゃったかな」

「どうした。後悔しているのか」

「ううん、そうじゃない。荒木さんのことは、これで良かったと思っている」

「じゃ何？」

「さつきバーで、卓也と結婚の約束をしているっていっちゃったでしょ。きつと明日になれば、会社中で噂になってしまっただらうな

「思ったの」

その一言で、なぜか卓也の顔に、笑顔が戻ってきた。その笑顔は、まるで必死に堪えているが我慢できずに笑い出してしまったように見えた。

「ははは。それは俺が『フィアンセ』だといえって、亜季にいったからだね」

「まあそうだけど。別に婚約しているとまでいわなくても、何とかなったのかもなって……」

「やっぱり後悔しているんだ」

「違うわ。別に後悔なんてしていない。ただ会社で噂されることが、ちよつと嫌なだけ」

「ま、それも俺の作戦のうちだったんだがな」

「えっ？」

とうとう卓也は大きな声で笑い始めた。笑いながら卓也はいった。

「だから亜季が会社の人の前で、俺をフィアンセって紹介したら、もう引つ込みがつかなくなるんじゃないかって」

「そ、そういうことだったの。じゃ卓也は、最初から……？」

「そうだよ。やっぱり亜季じゃなくちゃ駄目だなって思ったんだ。

昨日のドレス姿には、惚れ直したよ。だから亜季、あらためて君のフィアンセに立候補したい」

「卓也」

空中を浮遊している個室の中で、二人の顔が近づいた。唇が重なり、亜季の目からメランコリーの含有量がゼロの、一筋の涙が流れ落ちた。

二人の顔が離れて、亜季が涙を拭ったとき、観覧車はようやく一周し終えようとしていた。さっきまでアリのように思っていた人々が、本来の大きさに戻っている。コスモクロックと呼ばれる観覧車は、文字通り巨大な時計だった。その時計はものすごく大きいがゆえに、わずか一周で二人の三年間という時間を埋めてしまった。

観覧車を降りると、二人は運河にかかる橋を渡り、正面にランド

マークタワーの見える並木道を歩いた。歩きながら卓也は、亜季のスプリングコートのポケットに何か小箱のようなものを押し込んだ。「何なの、これ？ 開けるわよ」

卓也はにっこりと笑って、頷いた。亜季が取り出した小さな包みは、鮮やかなエメラルドブルーの包装紙に包まれていた。ラッピングされた中に入っていたのは、やはり小さな小箱であり、その中にはダイヤモンドのはまった小さなリングが入っていた。そっとリングを手にとると、亜季は右手の薬指に差しこんだ。不思議なほどぴたりと、そのリングは亜季の右薬指にフィットしていた。

「それがフィア^{あかし}ンセの証だよ。俺がリングのサイズを知っている女は、亜季しかないからな。今日の帰りがけに急いで選んだものだから、気に入るかどうかわからない。でも、返品は禁止だよ」

そういつて一歩前を歩く卓也の大きな笑い声が、並木道に立ち並ぶ高層ビルに反響していつまでも響いていた。亜季は前を行く大きな背中に飛びついてから、リングのはまった右手を、横に並ぶ卓也の左腕に絡ませた。

(了)

5（後書き）

最後までおつきあいくださいまして、ありがとうございました。
是非とも感想をお寄せください。お願いします。

また次回作でもお逢いできることを、楽しみにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7832d/>

メランコリーを眠らせて

2010年10月8日15時57分発行